

垂水の文学(二)

『逍遙舎集』 (垂水市教育委員会蔵)

—南九州の国文学関係資料(十八)—

福井 迪子

本書は、垂水市教育委員会蔵本、伊集院兼愷の「あやめ田」に営んだ「逍遙舎」での風雅な生活の中から生れた文章集・歌集であり、兼愷の自筆本である。

表紙はなく「逍遙舎集目録」から始まる。もとは表紙のついた袋綴であったものか。現在は大和綴の形態で縦二三・四cm×横一六・八cm。一面十行書。和歌一行書。詞書は和歌より二字下げ。朱のミセケチ訂正があり、墨付四十七丁。大尾に「文政十三年庚寅冬書之 逍遙舎主人伊集院兼愷(花押)」と記す。

文章は、記三篇「逍遙舎記」「納涼の記」「雲錦岡記」、序一篇「逍遙舎十景集序」、雑文五篇「五月雨の晴ける日逍遙せし詞」「須磨の松をうつし栽る辞」「花のあるじ」「月の友」「雪のすさび」。和歌、春・夏・秋・冬・雑、附録の発句・狂歌・俳諧発句合わせて百七十余首が収録されている。朱で記されたみせけち訂正がかなりあり、文章の推敲過程を示し

ていて興味深く読むことができる。

末川周山の編んだ垂水第一歌集『浪の下草』には、周山の二五五首、伊地知季虔の二三二首に続いて、兼愷は百三〇首の入集をみている。

伊集院兼愷、天明六年生れ。安政二年没。垂水島津家家臣で文政三年家老となる。文武両道に達し、武芸は邑中の士に教授した。和歌を飛鳥井雅光に師事し、本書の他に家集『すさび草』十七巻を残し、天保六年には垂水の第二の歌集である『波の藻屑』を編纂した。華道・茶道にも通じ、『垂水奇話』の著作もある。行年七十。法号、潜竜。(垂水市誌)

本書の翻刻をお許し下さった垂水市教育委員会、種々御世話下さった町田満男氏の御好意に対して、記して心から御礼申し上げます。

翻刻

凡例

本文は原文を忠実に翻刻することを旨とし、垂水の文学(一)の要領に従ったが、文章集の作品には句読点を付した。また加えて、朱のミセケチ訂正・補入も可能なかぎりそのまま記した。

逍遙舎集

目錄

文

記三首

序一首

雜文五首

和歌

春四十七首

夏三十六首

秋四十八首

冬三十三首

雜八十首

附録

発句十句

狂歌十首

俳諧発句十句 (一)

逍遙舎集

逍遙舎記

北山のつれ道いと遠からぬ程にあやめ田といへる所あり。た、める山の姿めくれる水の流もさのみは高からず深からぬ物から、しつけく清らなるさま得もいはす。緑の苔滑らかにして、たてる岩ほもよしはみ、老たる林陰さひて、けもの、すみかさへ年ふりにたり。さして世をはなり遠里につ、きて耕へし収るのわき折ことに尽せず、後は岡辺より高ねにつらなりて、きこり草刈の歌時として」(2・才)

逍遙舎集

春一都

春一都
北山のつれ道いと遠からぬ程にあやめ田といへる所あり。た、める山の姿めくれる水の流もさのみは高からず深からぬ物から、しつけく清らなるさま得もいはす。緑の苔滑らかにして、たてる岩ほもよしはみ、老たる林陰さひて、けもの、すみかさへ年ふりにたり。さして世をはなり遠里につ、きて耕へし収るのわき折ことに尽せず、後は岡辺より高ねにつらなりて、きこり草刈の歌時として」(2・才)

文章の部冒頭(2・才)

和歌の部冒頭(19・才)

(47・才)

逍遙舎集

逍遙舎記

北山のはつれ道いと遠からぬ程にあやめ田といへる所あり。た、める山の姿めくれる水の流もさのみは高からず深からぬ物から、しつけく清らなるさま得もいはす。緑の苔滑らかにして、たてる岩ほもよしはみ、老たる林陰さひて、けもの、すみかさへ年ふりにたり。さして世をはなり遠里につ、きて耕へし収るのわき折ことに尽せず、後は岡辺より高ねにつらなりて、きこり草刈の歌時として」(2・才) 絶る事なし。遙なるよもの佛も見はやすくま／＼立つとひて高野・熊の峰・竹崎・上野・黒岩・白山・柳河など目路の及ふ限は詞の及はざるになん有ける。いさや斯る所の山みつに心の塵をす、きたらんはこよなくも潔かるへし。ひたすらにのみ住はてすとも、よしやあしの根のかりそめにもと思ひ入て、つるにひとつの逍遙の舎里をかまへぬ。竹の柱打たて茅の軒引おほひて、わつかに膝をいる、にたれりとせり。松の門人を迎ふるの為にまうけす、常は八重葎のみとさし果て、た、く嵐の音信もさひしく、一筋の道誰にとはる、とてかきも払はん蓬とちそひ落葉つもりて」(一) 狐うさきの行かよふ跡たに稀也。渡せる谷の朽橋ふみならずにも物危く、掛樋の水のよとみかちなるもさすかに心細し。春の籬たふれ傾きては歎冬のこかねも其光うすく、秋の壁やふれそしては、つたの錦も其色あさやかならず。まやの余りにはかなけなるはいよ、五月雨もくたすにやすく、こからしも

文政十二年庚寅冬書

逍遙舎主人

伊集院兼恒



たまるにかたし。かくよろつにやつ／＼しきことから世にたつさはれる
 人／＼はいさ、か見入へき心地もなきや。あたり近き木のもとをへたて
 、まはらなるさ、ふきをしつらひ住つきにたる山もりあり。彼なんつれ
 へをこと、ひかはすも岩木よりけに哀知かほ也。さてしも梅の窓風か
 うはしきあしたは鶯の声に」^(3・オ) さそはれ、浅茅の砌霧にしめれるゆふ
 へは薄の尾花にまねかれて、霞を憐れひ露を悲しふの思ひを深うす。花
 は則わかあるし也。そむきいとふのことはり有へからず。月はすなはち
 わか友也。馴したしむの契なかるへきかは。池のあやめに郭公の時待え
 たる声を嬉しき、いはまの泉にむすふ手の涼しきをよろこぶ。椎の真柴
 の小夜時雨にはかことかましきね覺を驚き、ふりしく庭のしら雪には我
 かふみ分ん跡をおしむ。もし思ふとちわくらはにとふらふ時は、やまと
 もろこしの言の葉をすしあひ、折につけ事に臨めるのなさけをかたらふ
 まとゐの余りに、手枕さしましへてはかたみに」^(四) 蜘蛛の夢をたくら
 へ、興にふれ歩みをはこひては野沢にくたりて若菜をつみ、岨を傳ひて
 このみを拾ふなど、とかくにすくしきつる千／＼の趣は玉霞のつふ／＼
 にいひ尽すへうもあらさりけり。皆これかしこを憚り爰を顧るのわつら
 ひなく唯にをのれを楽しひこ、ろさしを養ふのすさひとす。さ、かにの
 いかにしてかは世を背き身を逃れ、太山の雪に名を隠すの輩に随はんや。
 いてやかみ^{あかりての代の程}つ代の昔よりして心に物このみせるくせのなからん人や有
 へき。あるは富るをたのみ、たふときをねがひ、たからをむさほり、誉
 れを求む、あるは琴をしらへ碁をかこひ、詩を作り酒をほ^いるま、にす。

其品春の田の」^(4・オ) すき／＼に秋の草の色／＼也といへれと、好める心
 はなへてひとしかるへし。されはかしこきひしりたに人ことにひとつの
 くせはとかこち給へりしたくひになすらへ、我か山みつを好めるのくせ
 は人の思ひゆるしつへき事にこそ。

納涼の記

水無月十日余りの頃、たへまうき暑さを逃れんとて、あやめ田のいほり
 にまかりぬ。藤原貞良、平景雄、藤原実有、大伴兼頭同じ志なれば伴ひ
 つ。けに山陰は日の光すくなうして苔むす庭みとり滑かに、しけれる林
 も若葉なよひやかなり。打そよく軒の檜柴にはまたこぬ秋を疑ひ、下露
 払ふ」^(五) まつ風には、あらぬ時雨をあやまたる。されは、あかぬはしる
 に扇のならすへきをわすれ、せける清水に袖のしつくをいとす、ある
 はひさこの酒のえひにむすはん夢をねかひ、窓の竹のうきふししけき世
 を遠さくるなど、心のま^ににあされ興して、後のあさけりをしもかへり
 みす、池のぬなはのくりかへし空ゆく雲のさためなく何くれとしたしみ
 かたらひあふ程に、木すゑの蟬のこゑ入日をむかへ草村の螢ゆふへを急
 くに似たり。いてやかうやうのおかしき折から唯にはさこそほいなる
 へしとて、人／＼ことさへくからうたともさせ、てふ虫のつゝりいて、
 誰かはむけに」^(5・オ) 打すくいてんとす、むれは、そこなるた、うかみ取
 ちらしつ、

塵の世をへたつとおもふ松の戸に

夏もよそなる山おろしの風

となんかいしるして、あるしの口つからいと山深きさまにの、しりもてゆくもあやしう片腹いたきわさなりかし。

雲錦岡記

あやめ田の庵に近く打臨みて小高き岡あり。かしらは北さまにそひえて遙の嶺に連なり、すそは南流れにや、さしおろして、外面を引かこへらんやうにた、みなし、をのれ世中をへたてかほなるもいとおかしく、岩ほのさかしきた、すまる常盤」の木のふりぬるよそひまてよろつ見所あるさま也。そこに此年頃桜と楓とを数あまた移しうへて春秋の山住を慰めんとす。されは咲つ、く花のあしたは風に晴せぬ白雲を重ね、染渡す紅葉の夕はへは日影にか、やく唐錦をさらせり。是を雲錦岡となつて常に其枝くの栄ふへき事をねかふ。みつから行通ふたひことに或は其根をかたうし、水をそ、き、或はこと木のさはりおほかるをのそき、かの郭氏とかやかひけんあしたに視て暮に撫已に去て又顧るのたくひも思ひ出られ、もはらあかなくにめてはやして、いや年のはに栽そへなんとす。そは散やすきあた物の翫ひにして□な□いたつらわさにこそあれ。余」(6・オ)りに色に耽る心のすさひにやなと□かたへの人はあさみ笑ふめり。

抑世に松杉のたくひをうふるやからは、是を柱うつはりのれうにひさきて、其たからの、家を養ふをもて心の樂とす。栗柿のたくひをうふるや

からは、其このみの味ひの口を養ふをもて心の樂とす。我か花紅葉をうふるときは、其色の目を養ふをもて心の樂とす。いてや養ふ所の品こそことなりといへれと心の樂しふ所を樂とせんにはいかてことなる事あらんやは。

逍遙舎十景集序

過つるその年、五月はかりの比ほひ、かるやみきはのあやめ」の田てふ所にあさまなる山の下庵をむすひ、月のゆふへ花のあしたに行かひつ、我か志を養ふのすみかとす。其趣のつはらかなるは、前に逍遙舎の記になんかいしるしぬれは、今はた賤たまきのくりかへしいひつ、けんもわつらはしくてみなもらしつ。遠近のよもの望みあまたなりける中に、わきて目とまる所くの物にふれ時に臨めるのふせいを愚なる口すさひにいひ出せるあたこと、も紙のはし引きやりかいつけ置しを、ある友とちの窺ひ見ていふやう、こはこれ既に十の数になんたらひにけるよ、いてや大御国にも唐土にもなにかしの山莊・くれかしの別業など、呉竹のよ、にいひ伝へて」(7・オ)あるはたち、あるは八つのなかめをしもゑらひいて歌に詩にもてはやすは、ためしおほかなるわさそかし。されは此十の題をなん設けて、いくその人にもあたへよろつの言の葉の花かいあつてんは、いとく山住の興をさかすへきひとふしにこそ、と田面の引板のひたふるにいひさとすをき、て、正我も稲舟のいなにはあらぬこ、ちせればやかて其す、めに随ひ、所くのありさまを絵にあらは

もたりしそとよ。されは大かたの事の心思ひしれらむ人は又我か心をも
さこそとおもひしるへきになん。
「(10・オ)

花のあるし

あやめ田の庵の庭にいたく年へたる桜のひと木あり。本のおほいさいた
き余れる程して、しける枝老たをみあやしの根はひろこり、爰かし
こ苔むしけるさま所からいとけしきはみたり。是なん春のもてあそひ物
にして、花ひと時のあたなることほりも思ひわきまふる事なし。いまた
ひらかさるに臨みては、雨の恵にもれさらんをねかひ、露のうるほひの
暖かならんをこふ。遍ねく盛なる頃ほひは、嶺の嵐の絶すこと、ふをい
とひ、霞の袖のおほふかひなきをうらむ。や、散方に到りては梢の雲の
晴のくをかこち、林の雪のふりゆくをおしむ。ちれは咲いてぬ初よ
り落果るの終りに及ふまで色に染るの契ねもころにして、春の心いつし
□のとけくもなし。唐土のひしりの詞に、いやしき人の物をねかふや、
いまた是を得ざる時は得る事のなからんをうれへ、既に是を得る時は、
又失はん事をうれふとかやとき給ふるも斯るたくひになん。しかはいへ
と古くも身にかへてとも歎き、なくにしとまるなといひ置ためりかしこ
くたふとかりし人／＼も花にふけるのなさけはさしもせちなるにこそ。
抑是をめつる心ひと筋ならず、たま／＼吹送る風の匂ひにさそはれ、浅
茅の道の遙けきを分て松の門の深きをとふらふ」
「(11・オ) 時は、花をもてあ
るしとし我をもてまらうと、す。あるひは草の庵押開き、竹の窓により

ふせりて山水の清きに嘯く時は、我則あるし也。花則まらうと也。或は
やまとうた・からうたの友とちを迎へて折ふしのまらうと、する時は、
我も花も同じくあるしたり。或は人も我も帰り果て、鶯のこゑほのかに
音つれ月の影朧に打霞み、見はやすまらうとのなき時は我も花もまたあ
るしたらす。まゐかりいづれを。まらうと、し、いづれをあるしとか定
むべき。はかせめける人に此由打かたらへは、其名ありといへ共其札な
けれは其物たる事あたはすなとけに／＼しう聞ゆるもいとわつら」
「(12・オ) 其物にあらず

はし。いてやあるしもまらうと、も定れるわざのなきこそ、むへも山
里の趣ならむかし

飯の世のかりのやとりにはかなくもいづれを飯のあるしとかせむ

月の友

葉月の半やうや□過てのゆふへ逍遙舎にやとれる事あり。相知ける人み
たりよたり山居の風流をとんとてわか跡をなん追ひ来りぬ。とみにう
れしく迎へいれて、あるしめきたるさまもいと興あり。つきぬなかめを
翫ひては共に詞腸のつかる、を忘れ世のかまひすしきをはなれては」
「(12・オ) 互に雅談の熟するをよろこぶ。折しも立待の月影東の山のはにさし昇り
て、吟嘯の長きをまし醒酔のほしるま、なるをたすけ、くまなく澄渡れ
るさまよろつにいへはさら也。けにや此宿りにあかれぬ友としたしまん
もの月より外には何をかたのま、し、など思はず独こちしければ、かた

へのかしこけなる人はやくも耳と、めたる顔くきにてかたゑみていふやう、抑友たちといへらん事は心の同じきうへにこそあれ。今や月をもて友とせんには、つゐに仁を輔け善を責るのことはりをしらす金を断袍を同しう聞ふするのよしもあらず。魚肆のあしきに近つかすといへ共、蘭室の(13)よろしきに入事あたはず。切々の言をもきかす恋々の贈をも見ず、山水のしらへも知るによしなく、膠漆のたとへも取に道なし。すてにかれに頼むへきの益なく我と同じうするの心もなし。いかてさはかりには親しみ給ふらん。我答へていはく。和君は文学を習ふの人也。我は幽趣を憐ふの人也。其好める所もはらたかひて、其見る所又ことなり。いてや今宵の月の如き千里の空さはやかに晴て、一村の雲も残らず、遠近の山のたゝすまるかしこ爰の川の流れ蒼茫としてゑかけるにひとし。叢の露玉をつらね池の泉鏡をみかく、門田の鴨のふしともあらはれ、嶺越の鴈の翅をもかそへ(13・オ)。つへし。軒端の鶯のあさやかなるはよるの錦猶かくれず、籬の萩の打しめれるにはまたきに初霜の白きを置けり。浅茅に埋む虫のね、苔にむせふ掛樋の声もいと、さえ増るは所からにや。柴の戸ほそさす事なうして人の音つる、をきかす、巖の嵐の折々木の葉をとひくるも物心ほそし。夜色淒涼としてすさましく、秋気肅肅として身にしみにたり。園庭に歩みを移せは随へる影袂をおそひ、艸庵に肱を曲れは馴ぬる光枕を窺ふ。筆を染れは碩にみち、酒をふくめは盃に浮ぶ。此時に及んで清□しつかなるの心むつはすして月とかなひかたらはすして同じ事(14)あり。或は林の梢をてらして霞める花のありかをおしへ、

結ふいは井にやとりては時しらぬ氷に暑さをそく。積れる雪の山陰にはとれん門のけしきをそへ、あやしのさうしともまさくるには、あらぬ燈の明らけきをか。皎々としてわか塵想をさらしめ、悠々として我か閑情を深うす。ふるくも謝荘は賦を作れるの誉れを高うし、庾亮は楼に登るの興をのこせり。されは其益ある所むけに少しと言へからず。其友とする所さのみおろかなるにも侍らし。時にそなる人々笑ひとよみて、夜もいいたうふけぬらん程に、かゝる言の葉をも又こそは聞侍らめなとたはれあひて(14・オ)。皆さそひくして帰りさりぬ。独は今はと打ふせりたるに(14・オ)。木々を闇の月のみ我か寂寞を慰むるに似たり。

雪のすさひ

おほよそ春秋のうつろひかはるにつけても、事の心深うおもひしれらん人の為には、さまでならぬ草木の上も、其程品品の哀はいつしかたえさめりかし。さるを愚に心なき身にしも月雪花の世にもてはやすたくひは、さすか目とまるならはしにこそ。ことしもやうく暮近く成て、しら雪のいみしう降つもれるあした、あくかる、心の催しには山路のありさまもふりはへなつかしくて、あやめ田のやとりと思ひたちぬ。空は猶(15)かきくらせるに、ふゝきにたへぬ袖のひち笠手もたゆく打かつき、かせ杖携ふるにはおよひもこゝえおちぬへく、あやしのふるくつ取つけたるもけうかるおのことや、よそにもろうせらるなるへし。道の程さはかり遙けからねと、常よりはたはやすくも覚えず、こゝら折れたをめる竹の

下陰なと過わつらへるもいとたと／＼し。ゆくての杜の木立岡のさ、ふもそれとなくかくろひまかへて、初めて通ひわたる心地する。からうして登りつきたるに、荒にし草のいほりもとみにきらめけるいらかをみかき、傾きし律の垣ほもなよひかなるかこひにつくろひなせり。されとなそへなくうらさひぬることから、よろつ(15・オ)とにかくに山里ひたり。岩も清水水によとみてなれし掛樋の音信たに聞えず、外面の松の嵐もうつもれ、林の鳥の友よふ声も稀也。池のつら、のむすほふるには芦鴨あしの床やすからぬうきねもしるく、さらてもとち果し浅茅の砌はまいてかき払ふへきやすかもなし。静に窓の戸押ひらきて爰かしこめくらし望むに、よもなる野へも高ねもひとつけやけき色につきて、有しにもあらずおもかはれり。今や黒岩の名もかへまほしく、白山のとなへそけにいちしるき。折々からかに散迷へるには吹きそふ風の行衛もうしろめたく、岸の柳のいとかよはけなるはたまはかてに打なひく(16・オ)もはかなうねたしや。あま飛ふ霜の鶴よそひを失ひ、田つらにむれる鷺の翅もわかれず、木々の梢はまつさく花をおほめき、峯遠き炭竈の烟の末も春の隣に霞の倂をもよほす。いづれもおかしういさきよきさま、見おこす心さへ塵なかりぬへし。軒端の杉の枝おもけなるにも、かの京極中納言の、まつ人のなとこち給ひし昔もおもひよそへらる折しも、麓の道の絶にたる。より雪ふみ分るあおとさやかに聞えて、やかて籬の外に打しはふけるは、こは誰にかとゆかしみまとふに、れいの山もりのとふらひ来るになん有ける。跡つく庭のうたてくいとほしけなれと事とふ(16・オ)なさけの

わりなく捨かたうて、や、そこにはうれしくこそとふあへしらへは、翁はしちかにゐりて、独は余りにつれ／＼しくおはすらんからになと馴かほに、しかもねもころなり。もてゐたるひさこ取いて、をのかし、酒たふへさせ、ゆるらかに語らひむつれあふ程に、翁心よけに打ゑみていと／＼けしきはみて申けるは、けきの雪こそなへてならすふり増りて侍るめれ、た、物しらぬ翁か為にはいさ、かめつらしと見やれるはかりにて何といひ出ん事も覚えす。かしの雪もいたつらにまはゆくはちらひて侍るそよ。君のことなる、かく山ふかう思ひうかれて分まうき道のつかれもくるおしとせず(17・オ)みる目のいたらぬくまもなう、からうたあるはやまと歌かいつらね、もはら身にしめていとおしみ給ふるには、あならぬ雪もことにはへあるこ、ちしてけに見る物につけて心を深うするとも申侍らん、とす、あにはほめそ、のかしめくも酒によろこへるの余りなめり。かしわれ答へて言やうそは唯に独を興し志を楽しめるのみにして、むけにかひなきささひにて侍り孫康とかやかふみをまねひ、相如とやらんか賦を作れるたくひには遙におとりたるわきになん。抑かしこき人の心はへにおけるや、かはかり冬の空いたうさえ渡りてみ雪の積れるにのそめる時は、錦の衾を引まとひても布の衣の(17・オ)やふれをかへりみ、あやのしとねを敷重ねても竹のすのこのあはらをうれへ、玉のうてなをかさらひても、わ□のふせ屋のすき間をあはれふ民の烟のかすかなるには其いとなみのわひしきを知り、薪こるおの行なやめるには其すきはひの暇なきを思ふ。思ひ知れる所おこなひえさるは思ひしらぬにひとしとかや。

さるから、物に感して恵をほとこし、折にふれてうつくしみをあまねう
す。か、れは散しく雪もおもておこしぬへう覚えて、いと、とよ年のき
さしをあらはす。是や見る物に随ひて心を深うすといふへかんなれ。時
に翁ことはりにやあきけん、酒にやえひけん、その「^(ウ) 俣かうをたれ、
打く、まりてさせるいらへたもせず、つや／＼まところみかちなるものと
はいなし。ほたのうつみ火我のみさし向ひて、郢中の詞は和する人すく
なし、なとつ、しりうたひてやみぬ。

逍遙舎集

春之部

春立ける頃あやめ田にて鶯をき、て

1 霜雪のふるすの山に春告てけさとけ初る鶯のこゑ

春の初つ方に

2 春の日の光も遅き山陰はまたうくひすの声もつ、かす

3 岩間もる音にも春はしられけり軒端の山の雪の下水

雪の消残れるを見て

4 消かての雪（の中にはくる）跡（たに見えぬ）もなし山路絶たる松の下庵（山の道）

霞の深く立そひける時

5 のとかにも立そふ山の夕霞うき世の春をよそにへたて、

6 山陰のふかくもかすむ色なれや真柴の烟くゆ へは

春雨のいさ、かふりける日

（19・オ）

（ウ）（18・オ）

7 春雨はふるともわかぬ山陰の霞にしめる松の夕露
庭なる柳を見て

8 春のくる色は見えけり山陰も染る花田の青柳の糸

軒端の梅の花咲ける時

9 軒近き花の雫の落そひて掛樋の水も匂ふ梅か香

10 うくひすのこゑたにさそへ山里の岩木に匂ふ梅の下かせ

同じ頃ほひ此所にやとりける夜

11 山窓のさしてこと、ふ月も哉梅か、さそふ夢のなこりに

月のい ほのかに霞みける

12 山陰は春の哀も立そひて軒のあまりに霞むよの月

花の木末に月の霞めるを見て

13 さす影も霞みて匂ふ桜戸の花のこのまに有明の月

14 咲く花の色もほのかに霞むよの軒端の山に匂ふ月影

曙近く鶯のなくをき、て

15 月は猶かすみて残る杉の戸に明ほの急く鶯のこゑ

ある曙に

16 桜戸のひまもあらはに明るよの外山の雲 に別る、

17 しらみゆく霞の奥に花鳥の色音もこもる の、山

雨のふりける夕へに鶯を

18 雨そ、く花の畦やつらからんぬれてこと、ふ窓のうくひす

夕暮に花見ける時

（20・オ）

（ウ）

19 鶯の埒とひくる声ならて誰をかまたん花のゆふはへ

庭なる花見給はんとて周山君いらせ給ひけるに、いまたあまねく咲出さりければ

20 いく度もとはれんとてや山里の花は盛をいそかさるらむ

花の盛に咲出ける頃

21 世のうさも見えぬ山路の家桜わきて心の花ものときき

〔ウ〕

22 さひしさも花にとはる、山陰は散なん後を誰に契らむ

23 春はた、花を□るしの柴の戸に契らぬ人の何またるらむ

花見にとて鹿児島の上親愛・海江田之剛訪らひ来りける時

24 春風のにほひや人をさそふらん花にとはる、山の下庵

25 花もけにうれしと思ふ山里に咲かはいひし春の契を

26 山深く契り置てし花心とはる、人に盛のこすな

人々来りて花見ける時

27 くれねた、花をあるしの山里に木の下ふしの契りやはなき

28 あすも猶まつ戸はその立かへり花をあるしに□りてもとへ

〔21・オ〕

折から山風の吹出ければ

29 山桜ちらてもさすかとふ人の心の花にさはく夕かせ

ある人の花見に来りける時、夕つ方に成て立帰るへきなと申けるに、名残惜みて

30 帰るさの名残を花も惜むらん猶夕はへの色を深めて

花盛の比、夕へに柴人の帰り過るを見て

31 柴人もしはしやすらへ色も香も深き山路の花の下陰

人々花見に来りて題を分ち哥よみける時、花似雲といふ事を

32 咲おほふ軒端の花も白雲のはれぬ山路とよそにみゆらん

花の散けるを見て

〔ウ〕

33 吹さそふ木の□風も春寒し軒のと山の花のしら雪

花の頃、久しくとひ来らさりける人の許に申遣しける

34 まつ人の跡いとふまて散にけり契る山路の花の白雪

あやめ田の花見にまかるへきなと友とちの申かはしけるに、其

日といったう雨ふりてはいとけす。あけの日、雨やみて伴ひま

かりたるに、既に盛も過方になりて風の吹さそひけるを見て

35 ぬれつ、もとふへき物を花盛雨のなこりのけふの山風

花の散ける比

36 山風のだそふやつらき花心とはれぬ宿の春をおしみて

石井に花の散けるを見て

37 むすふ手に散うく花も数そひて雫そかほる山の井の水

庭なるやり水に花の散うきて流れければ

38 行末はたか苗代に匂ふらん花散うかふ山のしたみつ

き、すの飛たつを聞て

39 たつきしの羽音も近きあした哉野へをかこへる草の籬は

夕へに蛙をきゝて

40 草深き山下の水の夕霞あはれをこめてかはつ鳴なり

庭のかたへなるわらひを手折とて

「(ウ)

41 折知^ルも哀露けし^{山陰}の朽^落葉か底の春のさわらひ

垣根に^歐冬の咲けるを見て

42 人とはぬ春をうしとも歎冬のいはぬ色なる花や露けき

43 まはらなる柴の垣ほもやまふきの花にかこへる春の山住

庭なる池のほとりに藤・杜若などの咲ける比

44 杜若咲そふ池にむらさきの色をふかめてうつる藤浪

朽木に藤の花の咲か、りければ

45 谷深^{き陰}の朽木の藤かつら花さく春の色も少き

春の暮に花も跡なく散果しかは

46 香をさそふ花のたよりもかつたえて青葉に残^ル軒の山風

「(23・オ)

47 鶯のふるすやいつこ花もねに帰る山路の春^そさひしき

「(ウ)

夏之部

夏の初に^軒端なる桜の若葉を見て

48 若緑おほふもくらき桜戸^{花に}はとはれし花の宿としもなき

垣ほに卯花を多く移しうへける時

49 いとはやもやとりとへかし郭公うつすうつ木の花のまかきに

郭公の初声聞んとて人々来りける日、なかさりければ

50 契りをく我か山里の郭公たか為おしむはつねならむ

周山君郭公聞給はんとていらせ給ふける日

51 陰深き山のかひある郭公とはる、けふの初音おしむな

其日郭公の一声鳴けるをき、て

52 ひと声をかたらひ初る郭公けふ待得てや汝もうれしき

ある人郭公の初音き、にまいるへきと申かはしけるに、[□]は

[□]有とて得もとふらはさりけるに、其日初て郭公のなくを

聞て

53 難面さは人の心よ郭公音つれそむるまつ陰の庵

54 音つる、情はふかし郭公契りし人をまつの戸ほそに

月あかき夜ほと、きすの鳴ければ

55 まつの戸のさしてとひくる月影にかたらひあかせ山郭公

56 なく声はさやかにもらすほと、きす木の下庵の月のゆふへに

ある暁郭公の鳴過けるを聞て

「(ウ)

57 月残る枕の山のほと、きす出てやよその寢覚とふらん

五月雨の晴ける日

58 ふりいて、なけや外山の郭公心もはる、雨のなこりに

郭公の声の稀なりける頃

59 今は早里馴ぬらむ郭公我かすむ山に声のすくなき

ほと、きす聞にまかりける時、あやめを見て

60 郭公こと、ひかはせ山陰の池のあやめのねをも残さて

庭なる沢辺のあやめを

61 生しける水のあやめも所か[□]わきてさは田の名に匂ふらむ

「(24・オ)

62 露おもきあやめの葉末打なひき山沢水にかほる朝風

門田に賤^{の多く}ともあまた並つとひて早苗うへけるをみて

63 外面なる小田の早苗に山里も暇なき世の業は見えけり

64 よそよりもさなへ取手や急くらん夕日少き山のすそわ田

くゐなをきゝて

65 水雞のみたゝくもさひし夕月夜さす影ほそき谷の戸ほそは

五月雨の降ける頃

66 常盤木もいと、若葉の陰くらき柴のと山の五月雨の比

67 せきいれし山水も岩こえて苔路絶たるさみたれの庭

五月雨の晴ける日、友とちの訪らひ来りければ

68 とち果し思ひも晴て五月雨の名残すゝしき軒の山風

夏草のしけるを見て

69 山風も吹たにはらへ夏草の露にとちたる庭のかよ^ひ路

池のかたへなる蓮を

70 谷風の匂ふもすゝし山水にはすの立葉の露もこほれて

池の蓮の咲ける時

71 池水も心濁らぬ山陰に咲やはちすの花そ涼しき

螢を見て

72 山住の学はぬ窓に飛螢ねぬよさひにあつめても見ん

73 ほのかなる螢の影に木かくれの岩根の水も見えてさひしき

柳河に螢の飛かふをはるゝ見やりて

「(25・オ)」

74 むれて飛ふよるの螢の行方に流もしるき山河の水

蟬のいたく鳴ければ

75 陰深き軒端の山の松風に時雨をそふる蟬の声々

ひくらしのなくを聞て

76 松風も夏の外なる山陰にゆふへをいそく日くらしのこゑ

夕立のふり出へきけしきなりける時

77 高ねには夕たつ雨やきほふらん軒端の松にさはく浮雲

夕立のふり、晴ける時

78 入日影すゝしく晴て夕立のすきの木末に残る山[□]せ

月あかき夜庭なる山水を手につくとて

79 くるゝよの岩根の清水結ふ手にとけては氷る月も涼き

すゝみのつゐてに

80 結ふ手の雫もすゝし山陰の岩もる水にかよふ松かせ

友とちの納涼せんとて来りける時

81 世の塵を払ひ尽して涼しさも心に余る軒の山かせ

82 ちる露も夕くれかけて袖の上に秋をやならすならの下風

夏の末つ方に

83 山里の夕日かくれに通ふ也また世にしらぬ秋の初風

秋之部

秋立ける頃

「(26・オ)」

「(ウ)」

「(ウ) (27・オ)」

84 へたてすむ片山陰も蓬生の露のよすかに秋や来ぬらん
まかきの萩のそよくを聞て

85 さひしきは馴こし山の夕暮も心にさはく萩のうはかせ
宮城野となつけし萩を庭にうつし植ける時

86 木の下露も色そふ真萩哉山路にうつすみやきの、秋
庭なる錦水に萩の咲おほひけるを見て

87 色深き花の下水秋は猶萩の錦の名に流るらむ

萩の花の散方に成ける頃

88 あたにちる庭の小萩の花の色に鹿のねさそへ軒の山風

夕へに虫の鳴ける時

89 夕露の数そふ俣に虫のねもや、あらはる、庭の浅茅生

松虫をきゝて

90 くつかつらくる人もなき山陰にうらみて誰をまつ虫のこゑ

ある時友とちの許によりて遣しける

91 うき事はきこえぬ山の下陰も世のな^らは^しにあき風そ吹

秋風の吹ける折

92 外面なる山田の鳴子吹すて、軒端の松にさはく秋風

秋の夕暮に

93 苔青き庭の木間の夕付日残るもさひし秋の山陰

月を見て

94 さひしさも誰かはとはん山陰にもりくる月の光ならては

「
(28・才)

95 山松のおほふ俣なる下庵は月もこのまの影やすみうき
此所にやとりける時

96 山風のた、き捨たる松の戸にまつとしもなき月そとひくる
月いとあか、りける夜

97 かりにたにとふ人も哉はし鷹のと山の庵の月はいかにと
八月十五夜に友とちの訪らひ来りければ

98 世のうさも思ひはるけよ山里に月はこよひとすめる秋風
心翁禪師の月見んとて来りける時

99 塵の世のへたても浅き山陰に心の月をすましても見よ
月あかき夜爰にやとりて

100 岩そ、くかけひの音もふくるよの心にすめる月の下庵

101 石はしる谷の流の音ふけてよわたる月に澄る山かせ

102 瀧の音松の嵐も長き夜の月にいくたひ夢さそふらむ

時雨のふり過ける夕に月の晴ければ

103 雲払ふ軒端の山の松の風くもらぬ月に猶しくるなり

月の静にすみ渡りける時

104 木葉ちる軒の外山の月さえて露にしつまる庭の秋風

高野に鹿の鳴ける声の遙に聞えければ

105 すむ月の高野おろしやさそふらんと山を渡るさをしかの声

月のふけ行ける時

106 月はや、軒端の山に傾きて枕にすめる遠の川音

「
(29・才)

ある夜のふけ方に

107 このまもる秋の月もふけにけり馴ぬ夜寒の秋の山かせ
108 外山なる正木音してふくるよの月も身にしむ袖の秋風

秋のふけぬる比ほひ月を見て

109 山里の月のあるしも秋ふけて人こそとはね庭のまつ風
鳴の立ける時

110 たつ鳴の夜半のふしとも寒からん外面の小田の月の初霜
山田の色付ける比

111 庵近き山田のをしね色付て雁かね寒き秋の夕霜
鶉の鳴をきゝて

112 床しめてうつら鳴也山里は野へもひとつの庭の浅茅生
九月九日に庭なる菊花を見て

113 白妙の袖こそ見えね山住の独折しる菊のまかきに
114 尋ねきて共に折しる人も哉山路の秋に匂ふしらきく

霧の深かりける夕に

115 まさきちる嵐もたえて夕霧の雫にしめる軒の山松
ある夕暮に

116 鴟のなく栢の立枝に残る日の光もうすし山陰の庭
柿のもみちしけるを見て

117 露霜の染るもさひし常盤木の緑にまじる軒の山柿
蔦紅葉を見て

「
(30・オ)

118 古はてし片山畑のふし木にも秋しる色やつたの紅葉、

119 秋の色にかこふも深し蔦かつらはふ木あまたの山の下庵

庭の紅葉の盛なる比

120 露霜も深き山路の紅葉、は猶いく入の色こそふらむ
人／＼紅葉見に來りて歌よみける時

121 言の葉の露を待えて山陰の木末も秋の色をそふらん
或人紅葉見んとて來りけるに、いまた色の深からざりければ
見る
とふ人の心や深き色ならんまた初しほの木、の紅葉、
ヒヒ

122 同しき頃人の許に申つかはしける

123 山陰の紅葉の色は浅けれと心を染て見ん人もかな
外面なる錦岡の紅葉の盛なりける時

124 染出す秋の錦の岡の名も木、の紅葉の色に見えけり
同し所の紅葉の一葉にそへて、末川久命君に奉りける

125 露深き山路の秋も紅るの一葉の色にかけてしれかし
成章君此所の紅葉見給はんとていらせ給ひける時

126 思ひきや紅葉も浅き山陰に恵の露のか、るへとは
夕時雨の晴ける折、紅葉の散けるを見て

127 ぬれなからちるも色こき紅葉哉時雨はれゆく山の夕陰
庭の紅葉の散ける頃、或人の許に申遣しける

128 ふみ分て哀とも見よ山陰は心とちれる庭のもみち葉
紅葉、ちる木のもとを盛にてとはれぬ庭にかよふ山風

「
(31・オ)

「
(ウ)

秋の暮、紅葉の川水に流るゝを見て
 暮てゆく秋もよとまし紅葉、の流れてはやき山川の水

「(32・オ)」
 「(ウ)」

冬之部

冬の初あやめ田にまかりて

風さそふ山路の秋の跡とへは払はぬ庭に残る紅葉、

時雨しける折

雲霧のさらてもはれぬ山陰はいかにふりそふ時雨成らん

夕時雨ふり過ける時

夕時雨はれ行跡も松杉の雫そたえぬ山の下庵

冬の初此所にやとり居ける比、或人の許より、世中はうき事し

けしなとさま／＼申贈りければ、かへしにふみしたゝめて遣は

すとて、其奥にかきそへける

「(33・オ)」

定めなくしくるゝ、比は山里もかことかましき軒のなら柴

時雨しける夕へに

木の葉さへ山めぐりするゆふへ哉時雨てわたる嶺の嵐に

夜深 木葉の散けるを聞て

ふりかはる軒の木葉の音す也宵の時雨の跡の山かせ

庭に落葉の積りける時

吹払ふ風の跡のみ山陰の庭の落葉に見えて淋しき

こからの吹ければ

落葉せし木、にはたえて山松の軒端に残るこからの声

庭の薄の霜枯けるを見て

山里はまねく人目も枯はてゝ、残る薄にさやく夕霜

冬枯の頃人の訪らひ来りければ

山陰は霜かれてこそとふ人の跡も有けれ庭の浅茅生

池のほとりに芦の枯立けるを見て

池の面は氷らぬ程も山陰のみさひにとつる芦のしほれ葉

風の寒ける日

風さゆる 竹の落葉もとちそひて氷をいそく山の下水

庭の掛樋の氷りける時

たえ／＼に氷るもやすし山陰の落葉によとむ庭のかけひは

ある夜のふけ方に

石つたふ苔の雫や氷るらん夜半にかけひの音かはるなり

霰のふりける夜

玉あられさやくも寒し山風に馴ぬる夜半の夢もくたけて

遙の高ねに雪のふりつもりけるを見て

雨する柴のと山のこのまより雲るる峰そ雪に成ゆく

雪のふり晴ける時

雲 はるゝ、後も外山の梢より嵐にふれる庭のしら雪

跡つくる友はとひこていたつらに消るをおしむ雪の山陰

雪のふりける時

「(34・オ)」

「(ウ)」

149 倂に花ちる春もさそひきぬ山桜戸のけさのしらゆき

150 山深く又ふみ分る人もあらしいくへもつもれ庭のしら雪

其日友とちの許に申遣しける

151 跡おしむ宿とや人のとはさらん雪も友まつ山陰の庭

152 あとをたに何かい^とはん山住の獨におしき雪のあしたは

雪のいたく降つみける比

153 音信も雪にたえゆく山路哉心のまつの風もうもれて

154 柴人の軒端にくたる便りまでたえて日をふる雪の山里

155 をの^{つか}ら跡なき苔の通路もかさねてとつる雪の山陰

おなし折ある人によりて遣しける

156 まつ人の山路絶たる白雪はわれ跡つけて我やいとはん

157 いささらは跡もいとはし淋しさの心に深き雪の山路は

158 厭ふとて我より外の跡もあらし雪に絶たる山の下道

其夜此所にやとりて

159 山風の^たくひ、きも埋れて松の戸寒し夜半の白雪

160 深きよの哀とひくる友もかな月も色そふ雪の山陰

雪の積りける日友とちの訪らひ来りければ

161 ふ^みる山路は八重の白雪に深き情^心の色も見えけり

162 山深くとひくる人の心にはつもれる雪も浅しとや見ん

年の暮に

163 行年もさのみはいか、惜むへき其いとな[□]もしらぬ山路に

「^(ウ)

「^(35・オ)

雑之部

此庵にやとりける夜

164 鶏の声も聞えぬ山陰はふくるを星の光にそしる

夜の明方によめる

165 山のは、や、あらはる、霧の中に明るそ遅き軒の松陰

ある夕暮に

166 軒近き^峯は入日の色なからくる、にはやき山の下かけ

167 松杉の緑にとつる山窓はさすや夕日の影もすくなき

168 山人のつま木の道は暮はて、林に残る鳥のひと声

とある折柴人の帰りけるを聞て

169 庵近き高ねの雲やしくるらんぬれてそくたる柴人の声

夕へに椎柴なと折たくとて

170 折てたく椎のこやての夕烟心細さもよそに見ゆらん

人の訪らひける時、嵐のいたく吹出ければ

171 世のうさに思ひもかへよ山里になれぬ嵐の夕暮のこゑ

172 と^{くる}ふ人はいとひやすらん山陰の松の嵐よ心してふけ

友とちの初めてとひ来りける時

173 折々に猶音つれよ山水の浅き心をいとひはてすは

此逍遙のやとりをつくりて折ふし行かよひけるに

174 浅しとやよそにも見えん山水のひと方にのみすまぬ心は

「^(ウ)

「^(ウ)

「^(36・オ)

- 子細ありて、此庵を再びあらため作りける時
 175 年をへて猶すみ馴ん山水の濁らぬ方にうつすやとりは
 176 動きなき山の岩根にせきいれてふた、ひすめる宿の池水
 久しくとひ来らさりける人の許に申遣しける
 177 世をよそにすむはかりなる山の井のあかすは人の又もとへかし
 人／＼つとひて題を分ち歌よみける時、山家苔
 178 山住のとはれぬ庭にむす苔は我のみかよふ跡もはかなし
 179 爪木こる片山陰のひと筋は埋みもはてぬ苔の通ひ路
 夜深く庭の芭蕉のそよくをき、て
 180 夢さそふ嵐の声はしつまりてよるの雨きく軒のはせを葉
 或人の訪らひ来りし時
 181 深からぬ山路のをさ、かりにたに世のうきふしを思ひ忘れよ
 友とち来りて歌よみける時、山家竹といふ事を
 182 山住も道は直かれとはかりを竹のかけひのみつからそしる
 183 山すみの心虚しき友なれやうきよへたつる庭のさ、竹
 須磨の浦なる松の一木を庵のかたへに移し植ける時
 184 山陰に千世も馴見んすまの浦の塩木にもれし松の一もと
 軒近く植ける松を見て
 185 うつし植る木の下住の朝夕に音信かはせ軒の山まつ
 186 立なる、軒端の松よ音信のたえぬ嵐を何かいとはん
 成章君初めて此所にいらせ給ひける時

「
(ウ)「
(37・オ)

- 187 軒近き松の嵐のしらへまでけふはことなる山の下陰
 庭に松葉の散けるを見て
 188 苔深き緑の庭に山松の落葉の数も見えてさひしき
 此所の山を鶴山となん名によひければ
 189 陰深く生そふ松も所得て千世をならすや鶴の山風
 椎の実の落ける時
 190 秋深き外山の嵐そよさらに軒の落椎音さはくなり
 笹栗の落けるを見て
 191 手すさひに我も拾はん山猿のこつたふ軒に落るさ、くり
 ある夜颼の声をき、て
 192 むさ、ひの夜深く落る声すこし月も傾く軒の外山に
 暮深くからすの鳴けるに
 193 陰くらき軒端の杉の夕からす埒に帰るこゑ聞ゆ也
 夕へに鳩のなくを聞て
 194 友をよふねくらの鳩の声さひて夕日もうとき山の片陰
 爪木など拾ひわたりける折
 195 分ならず我より外に山鳥の跡も有けり岩のかけ道
 山からを見て
 196 山からも身の隠れかや頼むらんわかすむ谷の陰のうつほ木
 夜ふけて梟の鳴ければ
 197 深き夜の枕の山に聞ゆ也月より後のふくろうの声

「
(ウ)「
(38・オ)

鹿児島・川上親愛・海江田之剛訪らひ来りし時

198 垣はなる山の下柴かりそめもせをへたてたるすみかとをしれ
199 世のうさを慰めよともいひてまし是より深き山路なりせば

五月の初に、鹿児島・堀起護・尾上貞一はる／＼と此山莊
をとひ来りける時、あやめ田といへるをかしらにならへて

よめる四首

200 哀しる人を待得て山里にほと、きすきぬねをもかたらへ

201 山川の朽木の橋の危さもかけてとはる、道は有けり

202 めくりくる山のいはねのさ、れ氷心をすます程やなからん

203 立かへり又もとへかし白雲のはれぬ山路はわけまうくとも

同じく柴の戸と云を歌のかみにならへて

204 静にとすみなす宿は山水の岩もる音もとたえかちなる

205 花になれ月に友なふ山住の身の春秋はさひしけもなし

206 逃れえぬ世のはけしさは山陰の松の嵐に猶残りけり

207 とはるへき宿とはなしに柴人のかよひ馴たる山陰の庭

おなし折、人／＼此所の品ともを題に分ちて歌よみけるに、

竹の窓と云を折句にして

208 たてそふる烟もさひし軒端なるまつも老木の年へぬる陰

「(7)

「(39・オ)

209 宿しめて我も千年や立馴んすむてふ鶴の山深き陰

養種圃

210 移しうふるその、小草の花もみも老を養ふ種ならぬかは

琴橋

211 山松の風のしらへも下水の音にやかよふ庭の琴はし

摘翠原

212 つむ袖に野原の露そ分なる、若菜の後の春の早蕨

洗心池

213 山陰にむすふもす、し塵の世の心を洗ふ池のいつみは

吟花嶺

214 色も香も分いる袖のうらなれて花にいとほぬ山のかけ道

烟霞嶺

215 春深き松の烟も村々に立そふ嶺や猶霞むらむ

桃溪

216 世をさけてすむとや人の思ふらん桃の花さく谷の水かみ

楓堆

217 いくしほか心の色も染はて、あかぬ外山の木、の紅葉、

睡月園

218 我もいさ相やとりせん夜半の月すむや園生の苔のむしろに

竹叢

219 山深く世のうきふしや隔つらんいほりをめくるいさ、村竹

「(7)

「(40・オ)

逍遙舎園中二十勝廿首

獨鶴山

松菊径

220 さく菊の花にあらさぬ秋なれや落葉も深き松の下道

嘯風湾

221 夏衣立なれにけりはせを葉の下風そよく池のみきはに

錦水

222 花紅葉ちらても影の浮ひきて錦はたえぬ水の春秋

龍蟠橋

223 たつのふす名にや流れん山川にわたす朽木の橋そあやしき

乗雲台

224 世はなれて心深くも分のほる嶺のうてな雲の通路

蘭丘

225 ほころひて匂ひまきれぬ藤袴花は岡辺に草かくれても

芳池

226 蓮葉にまじるあやめも浅からぬ匂ひやかはす庭の池水

山靈巖

227 動きなき岩ほをしめてます神の守るや世々の陰深き山

耕雲澤

228 雲深き山沢水をせく小田のかへす／＼もすみならは、や

同前五勝五首

戴月阪

229 まくさかる賤かを笠に夕暮の月をいた、きくたる山道

豹隠洞

230 けたもの、かくる、霧も名に立てむなしき洞の深き谷陰

雲錦岡

231 花の雲紅葉の錦おり／＼にた、む岡辺の色そこふかき

柳塘

232 涼しさもひと木に見えて風渡る池のつ、みの青柳の陰

仙羊石

233 仙人の名によふ跡を松陰の苔むす石にと、めても見ん

逍遙舎十景十首

上野朝霞

234 山本はまた夜をこめてほの／＼と霞の上の野へそ明ゆく

戸外桜花

235 明くれに契らぬ風のとふもうし山桜戸の花のあるしは

柳河螢火

236 水くらき岸の柳の河風にてらす螢も影なひくなり

高野夜月

237 待出る影も高野の秋風に鹿のねながら月そすみ行

山田秋風

238 吹かはるゆくゑも見えて小山田の稲葉か末をわたる秋かせ

白山晴雪

「
(41・オ)

「
(ウ)

「
(42・オ)

「
(エ)

239 時雨つる夜のまの雲の跡晴て雪を光にしらむ山のは

熊峯白雲

240 月雪のひかりに向ふ折々は心のくまのみねのしら雲

竹崎過雨

241 雲霧もみとりになひく竹崎のは山曇りてすくる村雨

樵路夕照

242 木のまもる夕日もさむし柴人のかへさを送る袖の嵐に

遠村暮烟

243 こかくれに住らん里も夕暮の烟に見ゆる遠の山もと

附録

十景 発句 狂歌 俳諧

上野朝霞

1 中そらにあくる霞の上野かな

2 さは姫のねまきのきぬの薄霞木、の上野にけさやほすらん

3 あけたつや野松の上の横かすみ

戸外桜花

4 松の戸もへたてぬ春や花さくら

5 桜戸は浮世の欲をはなれすみ花の香盗む山風もつし

6 藪かりて庇つくろふ桜かな

柳河螢火

「
(44・オ)

「
(ウ)

「
(43・オ)

7 乱れそふ螢や風の柳河

8 冠の玉とひかりてさけ髪の柳河原に飛ふ螢かな

9 柳河螢も風にしたれけり

高野夜月

10 すめる夜の月も高野の嵐哉

11 軒端よりさしのそきたる面影はけたかい野への月の桂男

12 向ひあふ高野の月に窓低し

山田秋風

13 小山田や鳴子にくる、秋の風

14 小山田やか、しにさせる古鎌のさひしけにのみ秋風のふく

15 秋かせや山田にふゆる稲す、め

白山晴雪

16 山の名にかさねて白しけさの雪

17 朝あけの目にたつ山は白雪のかくすよりこそ顕れにけれ

18 雲黒き跡程白し山のゆき

熊峯白雲

19 立霞む雲や朝日のくまの峯

20 かき捨て墨絵のくまの峯遠くたか彩色のまじる白雲

21 入梅晴に居残る雲やくまのみね

竹崎過雨

22 竹崎や若葉になひく雨のあし

「
(45・オ)

「
(ウ)

23 一通り吹巻きてゆく嵐かなみとりのみすの竹崎の雨

24 竹さきや草刈かこの夕時雨

樵路夕照

25 秋すこし爪木の道の夕日影

26 柴人のしはしと休む山陰に急ぐ夕日のあしはとゝめす

27 残る日も影うそ寒しきこり歌

遠村暮烟

28 夕霧も立そふ里の烟かな

29 むつましき隣村とや夕飯の烟の末もなひきあふ中

30 夏木立くれて里ある烟かな

文政十三年庚寅冬書之

逍遙舎主人

伊集院兼愷（花押・印）

┌
(47・オ)

┌ ┌
(ウ) (46・オ)

┌
(ウ)